

あしよろ・ハードサポート通信

時折肌寒い日もありますが、木々は色づき、夜明けが早く、日も長くなってきました。町内では放牧がスタートし、牧草地で草を食んでいる乳牛をあちこちで見かけるようになりました。良い季節です。

◆ 乾乳期のカルシウム給与



分娩後、何となく調子が振るわない…

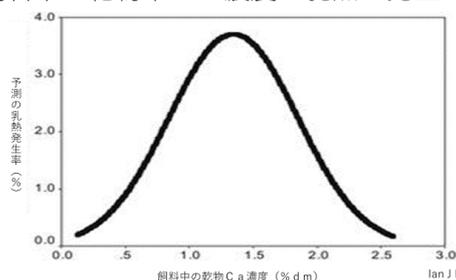
先月からの乾乳期の話題を続けます。

現在の酪農場での飼い方で周産期疾病の頻度が少ないなら今の方法を継続するのがベストですが、特に低カルや起立不能があるときは、先月紹介した採食量を落とさないための飼養管理、加熱大豆粕やグルテンミールのようなバイパスたんぱく質の給与に加えて、分娩前のミネラル給与を見直してみます。

乾乳期のカルシウム（Ca）給与量をコントロールすることで、分娩後の低カル発生リスクを抑えることができます。Ca 給与には大きく3つのパターンがあります。

パターン	① 特に何もしない	② カルシウムカット	③ カルシウム給与
やり方	一般乳配を給与し、ミネラル剤は給与しない	乾乳前期でCaを給与し、乾乳後期でカットする	乾乳期間を通してCaを給与する
目的	—	前期のCa給与で骨にCaを蓄積させ、後期にカットして骨からのCa動員をトレーニングする	Ca不足を回避する
注意点	粗飼料品質、環境、過密度などが変わると、疾病発生リスクが高まるかもしれない	後期でCa給与量を50g前後(吸収可能Caで20g以下/日)に抑えるのが難しい 一般乳配では完全なCaカットができないため、Caカットされた乾乳後期専用配合を給与する	中途半端なCa給与量だと逆に低カルのリスクが高まるかもしれない

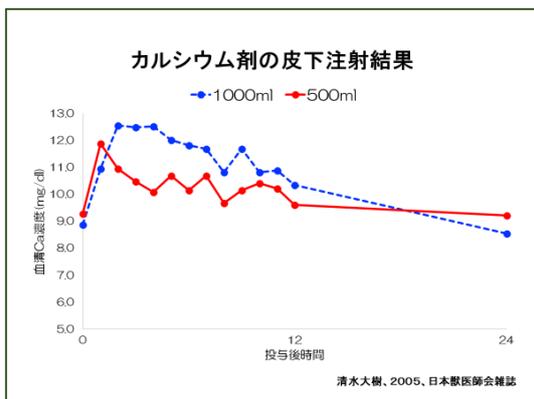
飼料中の乾物中Ca濃度と乳熱の発生



乾乳期のCaのポイントは、給与量をきちんと管理できているか？です。

左は給与乾物中Ca濃度と乳熱発生の関係のグラフで、Ca濃度が極端に低いか一定以上のときには乳熱リスクが低く、中途半端な給与量だとリスクが高まることがわかります。

◆ 分娩後のカルシウム剤の投与



町内でも多くの酪農家さんが予防や軽度の低カル対応として、分娩後に皮下注射でのCa補給を実践しています。

左グラフはCa剤を皮下注射したときの血清中Ca濃度の変化で、注射後Ca濃度が回復し12時間程度継続すること、ボトル1本500mlより2本1000ml注射した方がCa濃度を高く維持できることが示されています。

◆ カルシウム以外のミネラル・ビタミン給与

乾乳後期では、基本的な栄養充足とCaコントロールに加えて、他のミネラルやビタミンを給与することで、さらにスムーズな分娩後の立ち上がりが期待できます。

マグネシウム (Mg)	低カル発生を大きく抑える。 メニュー中Mg濃度を乾物0.4%以上、酸化Mg製剤30~50g/頭/日がめやす。 ミキシングではMg吸収効率が高い硫酸Mgを使うのも手（嗜好性に注意）。
硫黄 (S)	低カル発生を抑える。まずは硫酸Ca製剤100g/頭/日がめやす。 分離給与でも嗜好性マズマズの製品が市販されている。
ビタミンE セレン (Se)	強い抗酸化作用で疾病や乳房炎の抑制、血乳対策など幅広い効果が期待できる。 給与めやすはビタミンEが3,000~4,000IU/頭/日、Seが給与乾物中0.3%。 それぞれ単剤を使わないと給与めやすを補いづらいが、乾乳後期に焦点を当てたプレミックスも市販されている。

分娩後1週間までに潜在性の低カル（起立不能ではないが血清中Ca濃度が低く、何となく低カルっぽい）が多い牛群では、四変が2.4倍増え、乳量が3.8kg/日低く、初回授精受胎率が30%落ちるといった研究報告があります。分娩後のトラブルは、手間もかかります。周産期疾病が続くときは、「分娩前」の乾乳期管理を見直すサインと捉えて、早め早めで手を打っていきましょう。（久富聡子）

.....

・5/11（金）にJA2階で酪農女性勉強会を開催しました。奥さんや娘さんが集まり、和気あいあいと勉強し、楽しんでいただけたのではと思っています。今期は全5回
①5/11（済）、②7/10（火）、③9/18（火）、④11/14（水）、⑤1/22（火）開催予定
で（※学校行事等で日程変更があるかもしれません）、従業員さんも参加OKです。
近くなったらFAXにて都度ご案内します。